

生活の場に生かせるような実践力の高まりをねらった実践例 〈1年生の取り組み〉

(1) コミュニケーションの実態

本学級の生徒は、伝えたいことがあってもどのようにして話せばよいのかわからなかったり、内容をうまく伝えられなかったりすることが多く、大人の声かけや指示を待っている。また、相手の話していることをよく聞いていなかったり、内容が理解できなかったりして、受け答えがちぐはぐでやりとりが成立しないことが多い。また、教師や友だちに対して自分から意思表示したり行動したりすることがなかなかできない。学習中や指導を受ける場面では、顔を上げ相手の方を向いて話をするのができにくい。

(2) ねらい

- ・定期的に校外学習を行い、学校外の人との関わりを持たせる。
- ・人前で相手にわかるように話すことができるようにする。
- ・金銭感覚を養うとともに、困ったときにはどうするかという処理能力を身に付ける。
- ・できないことはなにかという障害認識を高める。

(3) 指導方針と手だて

将来の生活に目を向けさせ、自立した生活に向かって今後、生徒たちが利用するであろう公共機関の見学、余暇施設や、銀行の利用、買い物学習などの校外学習を通して社会参加の意欲と実践力を高めたいと考えた。即ち、将来の生活につながる経験や体験を校外学習の中で繰り返し継続してすることにより、意欲・技能・実践力を高めようとした。事前指導ではしっかり校外学習の必要感を持たせること、その上で教師主導でなく、生徒の試行錯誤を大切に生徒が学び取っていくように、課題学習の中でバスの時間を調べたり、行程を計画させるようにした。校外学習に際しても、グループごとに行動し、生徒たちが自主的な判断をする場面を設定していった。事後の扱いは、次の段階へのステップとなるように、校外学習を反省し、できたことは何か、何ができなかったか、次の機会には、どうしたらよいか話し合わせた。校外学習の様子をビデオカメラや写真で撮影し、反省の時に振り返る場面で活用した。

(4) 指導計画

	買い物学習のねらい	銀行の利用	公共機関・施設の利用	課題学習での取り組み
4月	メモを見ながら買おう	新規申し込みの仕方を知ろう	鳥取大学の見学	申込書の書き方
5月	決められたものを買おう	入金の仕方を覚えよう	郵便局の利用	入金票の書き方、店の人への
6月	組み合わせで買おう	入金に慣れよう	↓	広告の見方 尋ね方
7月	↓	払い戻しの仕方を覚えよう		払い戻しの仕方
9月	学習に必要なものを	払い戻しに慣れよう	授産所の見学	銀行の役割
10月	決めて買おう	↓		
11月	必要なものを	初めての場所(支店)で	県立図書館・県立博物館の利用	図書カード記入の仕方
12月	選んで買おう	払い戻しをしよう		身体や衣服のサイズ
1月	↓	↓	福祉作業所の見学	金種の区別
2月	予算内で買い物をしよう	必要な額を考えて	福祉相談センターの見学	概算の仕方、返品の方法
3月	↓	払い戻しをしよう	病院の利用、余暇施設の利用	病院の種類と利用の仕方

(5) 指導の実際

① 生活一般での実践例「校外学習～公共機関の利用～を振り返ろう」

a ねらい

- ・校外学習の反省点に気づき、発表したり、県立博物館・県立図書館・県民文化会館などの利用の仕方を簡単にまとめることができる。
- ・校外学習を振り返り、反省したことで、次の校外学習に生かすことができるようになる。



入館料を払うA子

b 実践例

1学期当初の校外学習では、校外学習に対する課題意識が薄く、校外学習に必要な準備や、お金の用意なども母親にしても

らっており、財布の中にくらお金があるかなど知らない生徒が多い状態であった。校外学習の場面でも、何を買ったらよいか忘れてたり、わからないままただうろろうしたり、教師が声をかけてくれるのを待っている生徒が見られた。また、買い物をした経験が少ない生徒や銀行を利用したことのない生徒もおり、校外学習に対する不安を持っている状態であった。経験の少ない生徒たちではあるが、校外学習を繰り返し実施し、成功したことや失敗したことを振り返る中で、生活の場に生かせるような実践力をつけることをねらいとして取り組んでいった。

事前指導では高1生徒全員を対象とする生活一般の学習で、自分たちの学習として課題意識を持つことができるように指導していった。また、実際の場面で行動できるように個別のメニューによる課題学習を組み合わせ、指導していった。校外学習に際しても、グループごとに行動し、生徒たちが自主的な判断をする場面を設定していき、教師は全面に出ずに、後方で生徒たちの行動を見守るように心掛けた。事後には、次の段階へのステップとなるように、校外学習を反省し、できたことは何か、何ができなかったか、次の機会には、どうしたらよいか話し合わせた。校外学習の様子をビデオカメラや写真で撮影し、反省の時に振り返る場面で活用した。反省点は忘れないようにカードに書いておき、次回の学習で反省点が生かせるように表にまとめ、掲示した。

校外学習	できたこと	よくなかったこと、失敗したこと	どうやってなおすか
鳥取バス ターミナル	・みんなで行動ができてよかった。 ・班の人とたくさん話げできた。	・まちがって学校に行ってしまった。 ・Aグループの班としゃべらなかつた。	・友だちの発表をよく聞き、計画を確かめる。
県立 博物館	・博物館のお金(入館料)を出せた。 ・吉田松蔭を見て坂本りょう馬と大久保としみちを見ました。	・お金をまちがえてはらったので悪かつた。 ・受付の人が言っているのに何も答えなかつた。 ・特別展だと言わずにお金を出したので悪かつた。	・お金の種類を確かめる。 ・これでよいですかと言う。
県立 図書館	・みんなに道を教えてあげた。 ・図書カードを作るのがわからなくて図書館の人に聞くことができた。	・むずかしい本を借りてしまった。 ・本を借りたけど本を読んでいて時間に遅れた。 ・としゅカードがつくれなかつた。	・読みたい本、読める本を選ぶ。 ・住所、名前、生年月日を書くようにする。
県民 文化会館 (と喫茶室)	・お金(ジュース代)をきちんと払えた。 ・間違えないようにお金を払いました。注文がひとりできました。	・見るときスカートがひろがつた(下着が見えてしまった) ・きつ店であゆる文する時なかなかきめれなかつた。	・身だしなみにきをつける。 ・はやく決める。

11月の校外学習では、県立博物館・県立図書館などの公共機関の利用を計画した。大体の場面で、落ち着いて行動ができた。しかし、特別展の入場料を買う時「高校生を1枚下さい」などが言えなかったり、「1枚ですか」「高校生ですか」など係りの方の質問に答えられなかったことなどコミュニケーションの場面での課題が多く見られた。これまでの何回かの校外学習で、スーパーマーケットや銀行などを臆せず利用できるようになり、町中で大声をだしたりすることもなくなり、マナーよくふるまうこともできたものの、初対面の人との応答はまだ難しいものがある。図書カードが作れなかったり、借りたい本を選ぶことができず本を借りることができなかった生徒も見られた。しかし、校外学習の反省後、土曜日の午後県立図書館に行き、本を借りた生徒も見られるようになった。

② 家庭との連携

校外学習において家庭との連携は大切であることはいままでもない。校外学習については、生活ノートや学級通信によって連絡し、協力を求めた。また、事前学習したことをもとに何をいくら購入するかなど、家庭で相談して決めるようにした。

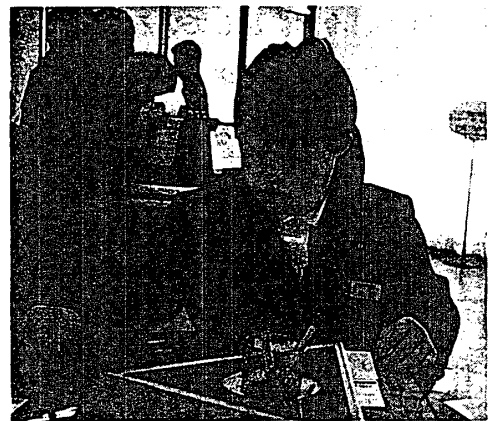
校外学習の様子は高1学級通信「はばたき」や個人懇談で知らせ、できたこと、できなかったところなど反省点を踏まえ、家庭でも機会をとらえて経験してもらうようにお願いした。家庭でも、生徒に自分のことは自分でさせたり、生徒と一緒に買い物に行って買い物の経験をさせてくださる方が見られるようになってきた。

高1学級通信	
はばたき	
H6.6.24	
自分のことは自分でしょう	
先日の校外学習の反省の時、こんなことがありました。	
先生「はじめ、財布の中にくら入っていたのですか。」	
C男「わかりません。」	
先生「財布の中にお金を入れたのは誰ですか。」	
C男「母です。」	先生「……………」
つまりこの生徒は、校外学習に必要なお金の用意を全部母さんにしてもらって、いざ自分がいくら持っていたのかを知らなかつたのです。預金の時に大いに困りました。同じ状況だとして、この生徒は特別ではなく、クラスの半数ではないでしょうか。事実、この生徒は何がわからなかつたのか全く分かっていませんでした。	

校外学習の様子は高1学級通信「はばたき」や

(6) 考察及び今後の課題

繰り返し、類似した学習を展開していくことによって、これまでの未経験なものへの不安や抵抗が少なくなっている。1学期の頃と比べて校外学習について「自分のできること」「できないこと」が少しずつではあるが気づくことができるようになってきた。生活に根ざした内容を教材として取り上げ、学習が生活の中で生かせるように校外での学習を意図的に組んできた成果であると思う。まだ、学習の場でも声かけや指示を待っていたり、相手が話していることをよく聞いていなかったり、内容が理解できず



銀行で入金票を記入する

受け答えがちぐはぐになったり、やりとりが一方通行になることが多い。意欲・技能・実践力をさらに高めていくことが課題である。また、教師の課題としては、まず、生徒たちの個別の実態をよく把握すること、生活に根ざした活動内容を設定した上でコミュニケーションの能力を育てる場面を焦点化すること、自主的な取り組みとなるよう留意し必要以上に介助をしないように心がけていきたい。また、一方通行とならないように常に家庭との連携も大切にしていかなければならない。(加藤)